

第1558回（11月17日）

1980年代のアメリカにおける農業構造の変容

（新潟大学経済学部）小澤 健二

第二次大戦後、1970年代初頭まで続いた趨勢と異なり、農業が好況を呈した1970年代には農場の減少テンポは著しく低下し、農場の階層分化の動きも鈍化するようになった。この趨勢は、農場数自体が少なくなり、また階層間の生産力格差が増大しているもとでは、80年代にも定着するかにみえた。だが、80年代には農業不況が深化するなかで、農場の減少に再び拍車がかかり、すでに存立基盤が弱体化していた中間層に加え、上層の一角を占める中規模家族農場、すなわち販売額5万～25万ドル層の農場減少が農業不況のなかで顕著となった。また、1980年代初頭まで増加し続けた安定兼業農場を主体とする、販売額1万ドル未満層の農場も減少に転じた。80年代には農村経済は全般的に不況に陥るが、そのことが農村での就業機会を縮小させ、兼業農場の減少とその所得水準の低下につながったのである。

もっとも80年代の農業構造の変容は、経営タイプごとに一様ではなかった。経営部門ごとの技術革新のあり方、当該農産物の市場動向、さらには農産物計画の影響などが複合的に影響したからである。例えば、政府補助金の支給上限が5万ドルに設定されたことにより、綿花や一部の穀作では農場の名目的な分割が進み、巨大農場のシェアは縮少している。

次に、87年農業センサスの特別調査を通して階層別農場の具体的態様をみると、農業経営だけで自立しうる農産物販売額10万ドル以上の上層の農場所得は販売額が高まるに従って増大し、なかでも販売額50万ドル以上の巨大農場は隔絶した所得水準を誇っている。また、中間層の経営基盤は総じて脆弱化しているものの、販売額5万～10万ドル層には規模

拡大を通して上層に発展しつつある農場も含まれ、これら農場にとっては上層の販売額10万～25万ドル層の場合と同様に、農産物計画は農場存続、農場経営にとって不可欠な役割を果たしている。他方で、販売額1万ドル未満の零細層はその内部に異質な二つのタイプの農場類型、すなわち安定兼業農場と、年金収入などに依存する高齢経営者や不安定就業のものが含まれ、後者の大部分は典型的な貧困農場から成っている。

このように1980年代のアメリカの農業構造の変容を要約できるとしても、アメリカ農業は地域的多様性に富むゆえに、以上のマクロ的な構造分析は地域ごとの農業動向分析によって補足されねばならない。また、階層ごとの農場の具体的態様も農業の技術革新の展開と関連した上層の生産力水準、農村経済の動向、および農家の社会構造などによって規定されているゆえ、これらの社会経済的諸条件に関する綿密な分析も要請される。